花火

がまごおりじなる特集

夏と言えば、祭り。祭りの主役はもちろん花火。近隣市町の中でも屈指の規模を誇る蒲郡まつりの花火大会は見て楽しいだけでなく、私たち市民にとっての誇りでもあります。今号では美しい花火の「がまごおりじなる」な裏側に迫ります。

星を並べる花火師の手

ビー玉サイズに丸めた「星」と呼ばれる火薬の球を、紙でできた玉皮に花火師が並べていきます。1ミリのズレでも花火が開いた時には1メートルのズレになるため、想像以上に丁寧な作業を繰り返します。

がまごおりじなる

シティセールス推進室 66-1225
観光まちづくり課 66-1120

世界トップレベルの技術

「キラキラっと瞬く花火ありますよね。あの点滅花火の技術には、絶対の自信があります。」花火を製造する加藤煙火株式会社・取締役の加藤克典さんは話す。「基準や順位があるわけじゃないけれど…」と謙虚に補足する。加藤煙火の点滅花火は大規模なイベントでも使用される。過去には全国の花火師が集う大曲の花火大会で優勝したことも。通常は3色程度が限界だが8色まで扱える、普通の花火に比べ8~16倍明るい、観客の頭上で打ち上げても燃えカスが落ちてこないように安全基準もクリアしている、など、驚くような話題が続く。大正15年から続く老舗の高い技術力が一発一発の花火に込められている。

星の大きさもノギスを使ってチェックする

コロナで気づいた蒲郡の良さ

「打ち上げ場所を貸してもらう時、市民の皆さんが本当に快く承諾してくれました。」例年通り開催できない花火大会に代わって、昨年実施された市内15カ所での打ち上げ花火。通常とは違う場所を打ち上げのために使いたいとお願いに行くと、誰もが協力的で地元から歓迎されていると実感できたという。住民の理解は打ち上げの成功には必須条件となる。いつもの花火大会では60人程度で打ち上げを行うが、昨年は打ち上げ場所が増えた分、約100人まで膨らんだ。といっても加藤煙火の従業員は1割以下で、ほとんどは他に職を持つ言わば地域の花火師である。手筒花火に携わる人が多い地域性がこれを可

上下の玉皮を合わせる時には集中力を要する

能にしている。時報を合図に一斉に打ち上げを開始し、そのうち5回は同じタイミングで同じ花火を上げた。バラバラに上げるのではなく、市内一連として打ち上げることで一体感を演出したかったからだ。土地の形状も味方する。海に向かってなだらかな傾斜のある街だから、数カ所の花火を同時に見ることができる。平坦な土地ではこうはいかない。竹島付近から見渡せば、大塚から西浦まで弧を描く海岸線沿いに花火が上がり、包まれているような感覚だったという。「あのクオリティで一斉に打ち上げることができたのは蒲郡だったから。」と加藤さんは話す。

江戸の花火を超えたい

花火の歴史を話す中で「江戸時代に発明されたカムロを令和の時代になっても超えられない。」という言葉が印象的だった。三尺玉で見られる、光の筋が柳のように尾をひく花火を冠菊（かむろぎく）と言い、失敗した花火が元になってできたものだと伝えられている。海外でも「カムロ」と呼ばれる人気の花火だ。一方、加藤煙火が最も得意とする点滅花火にも失敗が活かされている。間違えてできてしまった試作品で、理想としていた瞬きに近い効果を得られた。そこから研究を重ねて「点滅2.0」という花火を開発することができた。最先端の点滅花火は、今年の蒲郡まつりの花火大会で披露される。江戸の花火を超えたいという心意気が、がまごおりじなるな花火を生み出す原動力になっている。

三尺の冠菊を背負う竹島

全国シェア8割！蒲郡が支える日本の花火

市内にある企業、有限会社太田紙工と株式会社蒲郡玉皮は、どちらも花火を作る際に欠かせない半球状の「玉皮」という材料を生産している。聞きなれない玉皮だが、この2社だけで全国シェア8割を占める。つまり、日本で上がる花火のほとんどに蒲郡生まれの材料が使われている。2社が作る玉皮の見た目はあまり変わらないが、どちらも独自の工夫をし、お互いを尊重している。太田紙工・取締役の太田武明さんは「製造技術には自信があるけれど、2尺の玉皮や多数の穴の開いた玉皮は蒲郡玉皮さんしか作れない。」と言う。蒲郡玉皮・取締役の大塚裕介さんは「花火師が命をかけて上げるものだから、均質なものを提供できるよう力を入れている。」と話す。

海外の花火には時々いびつなものがあるが、日本の花火は美しい円形に開く。これには玉皮の精度が大きな役割を果たしている。隠れたところで、がまごおりじなるが日本全国の花火を支えている。

玉皮の新しい利用方法を模索しています

玉皮の中に玉皮を入れる

種類の違う星同士が混ざらないように玉皮の中にさらに玉皮を入れる。こうすることで開いた時に花火の色がくっきり分かれる。万が一の事故によるリスクを避けるため、花火師それぞれの作業場は小さく、2人程度で黙々と作業を進める。

花火を身近なものに

5月17日の午後、西浦小学校の校庭で、いろんな「星」（火薬を丸めたもの）に火をつけて色や燃え方の違いを生徒に説明する加藤さん。赤、青、瞬くもの、生徒たちが時には歓声を上げて真剣に注目している。平成23年から毎年、スターマイン総合学習として市内小学校の生徒に花火の構成を考えてもらう授業を行っている。子どもたちに花火を身近に感じて欲しいという啓発活動だ。グループに分かれた生徒たちは、「流れ星」「輝く個性」などテーマを決め、それを表現するために花火の種類・順番・構成を考える。蒲郡まつりで自分たちが考えた花火がその通りに打ちあがる体験は、一生の感動として心に残るだろう。

星の代わりにビー玉をつめる様子を熱心に見つめる小学生たち

三尺玉を上げる筒の前で、加藤さん夫妻（左）と「点滅2.0」開発者の横田さん（右）

花火裏話

・地上と上空では環境が違うため、開発中の花火を打ち上げることもあります。第１・３金曜日の夜に市内で「テスト打ち」を実施するので、運が良ければオフシーズンでも花火を見ることができるかも。

・花火は真下からから見たらキレイ？答えはノー。打ち上げ現場では爆発音も凄まじく、上を向くと燃えカスや紙くずが降って来るので目を開けられない状態になります。また、線を描く花火は近すぎると一瞬光るだけで何が起こっているのかわかりません。

・三尺玉に点火して打ちあがるまで 90 秒。直ぐに船に乗って離れます。早く逃げなくては！と思いながらも、ちゃんと打ち上がるだろうか？という不安もあり、とても長い時間に感じるそう。

花火を作る人、玉皮を作る人、大会を作る人。
皆の力が集まって、花火大会を支えていました。

夜空を照らす点滅花火
　色の数、明るさなど、あらゆる点で世界トップレベルの蒲郡の点滅花火。キラキラと瞬いたあと少し遅れてバラバラッと破裂音が聞こえてきます。まるでカメラのフラッシュと拍手の音を組み合わせたような華やかさ。

例年通りではない花火大会

「協賛者さんのプロポーズのメッセージが大会中止で流せなかったのが悔しいですね。」と話すのは、観光まちづくり課の朝倉主事。花火大会の協賛者は金額に応じて大会中にメッセージをアナウンスできる。いつもは企業PRや還暦祝いのメッセージが並ぶ中に、今までに見たことのないプロポーズのメッセージもあったという。しかし、新型コロナの影響で大会は中止、幻のメッセージとなってしまった。

今年も花火の協賛金を集めるため、3月末から多くの企業・個人宅を回った。決して景気の良くない状況にも関わらず、前向きな言葉をかけてくれる人が多く、花火への期待を肌で感じる。一方、2年続けて大会を開催できなかったことで、新人職員は経験を積めていない。また、日々更新される感染症対策の対応で、事務量は5割増しになった。3年ぶりの花火大会には〝例年通り〟が通用しないのだ。プライベートでも近隣の花火大会を見に行くが、気が付けば運営側の工夫をチェックしているという。三尺玉が上がる県内唯一の大会には18万人の観覧者が見込まれる。「今年こそ!って気合が入りますよ!」という言葉には、開催への真っすぐな意気込みが感じられた。

蒲郡まつり

ときめきサタデー

　よさこいや大道芸、e-スポーツ大会やミュージカルなど盛りだくさんのイベントで盛り上げます！

とき　7月30日(土)　午後2時30分～8時30分
ところ　みなとオアシスがまごおり、竹島ふ頭、市民会館ほか

納涼花火大会

　3発の正三尺玉、水上スターマイン、特大スターマインなど約5,000発の花火が3年ぶりに夏の夜空を照らします。

とき　7月31日(日)　午後7時30分～9時
ところ　竹島ふ頭

がまごおりじなる募集中！
　市民にとっての当たり前が、本当は魅力的なことかも。そんな蒲郡ならではを見つけ、作り、発信する新プロジェクトが「がまごおりじなる」です。あなたの見つけたがまごおりじなる、教えてください。